

氏 名	佐藤 洋美		
学 位 の 種 類	博士（文学）		
学 位 記 番 号	甲第 29 号		
学位授与の日付	2019 年 3 月 22 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
学位論文題目	源氏物語女房論		
論文審査委員	主 査 教 授	竹 内 正 彦	
	副 査 教 授	谷 知 子	
	副 査 教 授	松 田 浩	
	副 査 青山学院大学教授	高 田 祐 彦	

論文内容の要旨

本論は、平安時代の女房の実態をふまえつつ、『源氏物語』の表現を読み解くことによって、物語世界のありようを明らかにしようとしたものである。

従来、『源氏物語』の多くの登場人物に関しては、さまざまに論じられてきたところであるが、物語の中にはその個性が見えにくい登場人物も存在する。とくに女房は物語の中で作り出されたたんなる作中人物ではなく、背後には実体としての女房の存在を考えなければならない。『源氏物語』に見える女房に関する描写は、平安時代に実在した女房や女房制度などを前提としており、その解明は物語における女房のあり方を考えるうえで不可欠なものと考えられる。近年、研究の進展によって女房の実態はより明らかにされてきたといえるが、未だ不明な点が多く、個別の事例にあたりながらその様相を明確にしていく必要がある。

ただし、文学研究としてはそれらの究明が作品世界の解明へとそのまま結びつくわけではないことも留意しなければならない。『源氏物語』が当時の社会を反映した作品であるといっても、物語はあくまで虚構であるという一面を持つ。女房に関しても、実態をふまえてはいるものの、それがそのまま作品に取り入れられているのではなく、実態とは異なる様相を呈する女房の描写も存在する。女房の実態を究明しながら物語世界を見つめることは、『源氏物語』の独自性とともな、物語が虚構の世界をどのように構築していくかという物語の方法を明らかにすることにもつながる。

また、従来の女房論においては、特異な存在と位置付けられる「召人」や乳母・乳母子をはじめ、主要な登場人物の周囲に描かれている女房の中でも、呼び名を持ち、女房集団の中心となる女房たちが注目されてきた。しかし、『源氏物語』の中には呼び名を持たない女房や女童など、わずかに点描されるだけであっても、数多くの女房の存在が見える。本論では、そうした見過ごされてきた女房や女童に関する記述に注目し、『源氏物語』に登場する女房の背後にある実態にも迫ることを試みた。

本論は三部七章からなる。

第一部「Ⅰ 女房の照らし出すもの」では、女主人の周辺に見える女房に関する描写に着目し、女房の造形によって浮かび上がる女主人の人物像を明らかにしながら、存在そのものが物語の展開に関わる女房のあり方を論じた。

第一章「女三宮の十二人の女房―「若菜下」巻の密通をよびおこすもの―」では、「若菜下」巻の賀茂祭の御禊の前日に語られる「齋院に奉りたまふ女房十二人」に着目し、十二人の女房を奉ることで見えてくる女三の宮の立場を検討した。女三の宮が齋院に奉る十二人の女房は乳母を含む女房組織の中核を担う人々であることを確認しつつ、女房を奉る先である齋院が女三の宮の姉妹にあたる朱雀院の皇女であることを明らかにしたうえで、女三の宮の十二人の女房が皇族を代表する女三の宮の社会的立場を示すことを指摘し、光源氏や柏木が絡み合うことで密通が逃れ難いものとして描かれる皮肉な物語世界の様相を

考察した。第二章「王命婦論―「賢木」巻における「いとほしがりきこゆ」の対象を起点として―」では、「賢木」巻の光源氏と藤壺との密通の後に、藤壺の女房である王命婦が「いとほしがりきこゆ」という心情を抱くことを始発に、王命婦と藤壺との関係性を検討した。『源氏物語』に見える命婦たちが、それぞれ特有の存在意義を持つことを指摘したうえで、王命婦と藤壺との私的なつながりの深さを明らかにし、王命婦が物語に描かれることのなかったもうひとつの藤壺の姿を体現する存在であることを考察した。第三章「中納言の君の代作―「常夏」巻における近江の君への返歌をめぐって―」では、「常夏」巻において、弘徽殿女御と近江の君という異母姉妹の間で交わされる歌のやり取りの場において、女御方が女房による代作・代筆という手段を選んだことに着目し、近江の君が女御に送った歌が「笑い」の要素だけでなく呪的ともいえる力をも含め持つことであることを確認したうえで、女房による代作が主人の意向を汲み取り状況を打開していく女房の役割の一つであったことを指摘し、女房の存在そのものが近江の君の存在によって相対化されていることを明らかにした。

第一章と第二章で取り上げた女房は密通に関わる者たちであり、その女房の存在なくしては物語の展開がなしえない。そうした状況が実現するためには、女房が外界と主人とを取り次ぐ役割を担っていることが前提となるが、女房の思惑と主人の意向とは必ずしも一致せず、女房の言動のために主人の立場そのものが危うくなる場合もあった。以上の考察によって、女房が主人の存在や物語展開と不可分であることが浮き彫りになった。

第二部「Ⅱ 動く女童」では、女房の中でも女童たちの姿に着目し、女童独自の役割を検討したうえで、そうした女童が存在するだけでなく動きを見せることによって構築されてくる物語世界を明らかにした。

第四章「犬君のゆくえ―『源氏物語』における女童をめぐって―」では、「若紫」「紅葉賀」巻に登場する紫の上に仕える女童である犬君を取り上げた。『源氏物語』に描かれる女童に従来指摘されてきた女童の特性が認められることに加えて、主人の意向によって移動させられる流動性の高さと共に家に帰属する女童の出仕の形態を検証したうえで、わずかに二ヶ所に登場するだけの犬君の存在と不在によって紫の上の置かれた状況が浮き彫りになることを考察した。第五章「「今参り」考―匂宮と浮舟との邂逅をめぐって―」では、「東屋」巻の匂宮と浮舟の邂逅場面において、二条院で匂宮が目にした「例ならぬ童」が邂逅の契機となったことに加え、当該場面で「今参り」という語が三度重ねられていることに着目した。内なる部外者としての「今参り」の人々の実態を検討したうえで、「今参り」ではないにもかかわらず「今参り」として位置付けられていく浮舟のあり方をとらえ直し、匂宮と浮舟の物語が男女の物語には発展し得ないものであったことを考察した。

第二部では、第一部で考察した女房よりさらに個別性が認めがたい女童を対象とした。主人の意向を巧みに汲み取って対処する女房とは異なり、女童自身がどのような考えによって行動するかはほとんど語られない。しかし、女童は人々に姿を見られる場所に出て行くことが多く、主人の意向によってある程度自由に扱われる女房でもあることから、むしろ

ろその存在に注目することで物語展開や状況描写がより明らかになるものと理解できた。

第三部「Ⅲ 女官の位相」では、職掌を持って宮中に仕える女官の中から、東宮宣旨と典侍を取り上げ、歴史的資料を用いて女官の実態を明らかにしたうえで、周囲の人物の立場や関係性をふまえながら、公的な役割を持つ女官が物語に登場することの意義を検討した。

第六章「「春宮の宣旨なる典侍」論―「若菜上」巻の御湯殿の儀をめぐって―」では、「若菜上」巻において東宮と明石女御との間に誕生した御子の御湯殿の儀に「春宮の宣旨なる典侍」が奉仕していることに着目した。「春宮の宣旨なる典侍」という東宮女房の最上位にある女官が御湯殿の儀に奉仕することが極めて異例な状況であることを指摘したうえで、御子が将来東宮となり帝となることを保証するための存在として「春宮の宣旨なる典侍」が必要とされたことを論じ、六条院の外から人を呼び込まなければならない光源氏の王者性の陰りが見えることを考察した。第七章「藤典侍論―「夕霧」巻における雲居雁との贈答をめぐって―」では、「夕霧」巻の藤典侍と雲居雁との歌の贈答場面を取り上げ、藤典侍の持つ「典侍」という職掌に着目した。一人の男性をめぐる三人の夫人たちの立場や状況の変化が描かれた藤典侍の物語が明石の君の物語と対になるものとして位置付けられることを指摘し、「典侍」という公的な役職を持つ藤典侍と、夫の愛情に頼るしかない雲居雁との立場の違いが見えることを論じた。

第三部では、平安時代の女房の実態の影響を強く受ける女官を考察の対象とした。第六章においては、実在した女房に関する歴史的資料や記録を調査・整理したうえで物語の記述と比較することで、物語に登場する人物と歴史上の女官との間には差異があることを指摘した。そうした視点は、第七章のように他の作中人物と比較する場合でも有益なものであり、『源氏物語』に描かれる女房の背景にある平安時代の女房の実体にも目を向けることで、物語独自の女房のあり方が照らし出されてくることが明らかになった。

審査結果の要旨

『源氏物語』に登場する作中人物のうち、主人の周辺に点描される女房は、平安時代に実在した女房や女房制度などを色濃く背負った存在であるといえる。女房は、光源氏や薫、匂宮などの男性主人公や、紫の上、藤壺、浮舟などの女性主人公に比して、必ずしも個性的とはいえないが、だからこそ、当時の実態をふまえた造型がなされていると考えることができよう。しかしながら、古記録などの男性貴族の日記では、女房の姿が詳述されることはほとんどなく、その実態をとらえることは困難を伴うものである。事実、歴史学からも取り組まれてきたものの、いまだ明らかになっていない部分が多い。本論は、そのような女房の実態を、あらためて史料等を博搜することによって明らかにし、そのうえで、『源氏物語』の本文に寄り添い、丹念に読み込みながら、『源氏物語』の作品世界がどのように構築されているかを探求するものであり、きわめて意欲的な論であると評価することができる。

とくに、「齋院に奉りたまふ女房十二人」という女三の宮の女房に着目して、柏木による密通事件が呼びこまれてくる表現機構を明らかにした第一章「女三の宮の十二人の女房」は、本論の方法の有効性を示したものと高く評価できる。また、「若紫」巻の紫の上登場時に描かれる犬君という女童に注目してその出自等の分析から紫の上のあり方を考察した第四章「犬君のゆくえ」や、匂宮と浮舟の邂逅時に点描される新参の女童をとりあげて浮舟の造型について論じた第五章『源氏物語』「今参り」考は、物語を表面的にたどるだけでは見えてくることのない物語世界を浮き彫りにしており、従来の女房論にはない新規性を認めることができる。さらに、第六章「春宮の宣旨なる典侍」論には、これまでの研究史では看過されてきた女房（女官）に着眼し、史料をとことん調査し、分析していく姿勢が見え、研究者としての資質を十二分にうかがうことができる。

もちろん、女房論という新たな方法を構築していくためには、さらに自身の方法論を補強していく必要があろう。たとえば、本論では作中人物ではない、女房論をめざすとしているが、それは具体的にどのようなものといえるのか。あまりに実態ということばを強調するあまり、ややわかりにくくなってしまう感じが拭えない。むしろ役割や機能の面からそれを論理化できないものか、さらに考える余地も残されていよう。また、女房に関わる史料が限られているため、いくら博搜したとはいっても、推論によって論を展開している部分も見られないわけではない。飛躍ともとらえられかねないそのような部分を、いかに埋めていくことができるのか、今後の課題となるところである。また、先行研究をふまえることは当然ではあるものの、ややそれに寄りかかっている部分も見られる。先行研究に対する不断の問い直しは常に心がけてほしいところである。

しかしながら、そうした課題はあるとはいえ、本論文は、『源氏物語』における女房を、物語世界を構成する重要な要素として位置付けつつ、独自の源氏物語論の構築を目指すものであり、その独創性や新規性は高く評価できるものである。また、史料の博搜に基づい

た論理展開は、本論を特徴づけるものであり、今後の研究にもおおいに期待することができる。当該論文のうち、第一章と第四章にあたる論考が、それぞれ『文学・語学』（全国大学国語国文学会）、『古代中世文学論考』（新典社）に掲載された査読論文であり、本論の研究成果がすでに一定の評価を受けていることの証左となろう。

最終試験（口頭試問）においても、その着眼点や研究姿勢は高く評価され、先にふれたいくつかの課題についての具体的な指摘があったものの、今後の研究に生かしていくべき建設的なものであった。試問にも的確に応答しており、最終試験についても「合格」と判断した。

以上、論文審査、最終試験（口頭試問）の結果に基づき、本委員会は、全会一致で、当該博士学位申請に係る審査について「合格」との結論に達した。